



# ICT 海外ボランティア会会報

No. 58

2015年7月4日(土)

Home page : <http://www.ictov.jp/>

e-mail : [info@ictov.jp](mailto:info@ictov.jp)

## 目次

◆ 巻頭言

ICT 海外ボランティア会の皆様へ

日比谷同友会会長 宇治 則孝氏

◆ 特別寄稿

本気かどうかの評価のキメ手、数字で評価などしない

ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝氏

◆ 特別寄稿

私の国際経験

元通研基礎研究室長 梶原 正幸氏

◆ 技術協力視察回想記

在アフリカの仲間たち

NTT 元取締役人事部長 吉田 實氏

◆ 海技術協力の思い出

イアジア太平洋電気通信共同体 (APT)

NTT コムウェア元監査役 紅林 芳夫氏

◆ 第16回 海外情報談話会 開催模様

事務局

◆ 第17回 海外情報懇談会 開催のお知らせ

事務局

## 巻頭言

### ICT 海外ボランティア会の皆様へ

日比谷同友会会長 宇治 則孝

日比谷同友会会長の宇治です。ICT 海外ボランティア会の皆様には会の運営に当たって、大変お世話になっておりお礼を申し上げます。

まずは、昨年秋の平成26年度電友会ボランティア表彰おめでとう御座いました。

日比谷同友会は、先般6月4日（水）に総会を終えましたが、今年も「魅力あるOB会作り」に向け会の運営を進めているところです。会員からの意向や希望を出来るだけ汲み取り行事やセミナー、特典の拡大などの施策を行い、また様々な会員サービスの充実、価値ある情報の迅速な周知などを展開しています。これらの活動のお蔭で、日比谷同友会の会員数は、大幅な増加となっており、また、長生きする人も多い元気なシニア集団となっています。

会員の皆様は、長年に渡っての豊富な知識や経験をお持ちの方が多く、また、比較的多くの自由な時間があり、これをどう使うかが充実した素晴らしいシニアライフに繋がります。このため会員の皆様が会の施策に参加し楽しむだけではなく、自ら能動的に活動できる施策も進めて行きたいと考えています。

社会貢献活動はその大きな一つであり、その周知啓蒙を推進し、活動を行っている会員の支援を行い、更に社会貢献活動へ多くの会員の参加を勧めたいとも思っています。

ICT 海外ボランティア会の活動は、NTT のOB でシニア海外ボランティア（SV）を経験された方が中心となって作られ、活躍中のSV 支援や海外人材の育成、更には海外プロジェクトにも参加されており、長年培った技術やノウハウ、海外経験を生かしたボランティア活動が行われていると聞いています。

このことは、シニア生活の生き甲斐となり、更には長い視点で見た途上国の発展に繋がる素晴らしいボランティア活動であり、日比谷同友会が目指すものでもあります。

この活動を是非評価し、アピールしたいと思い、平成26年度電友会ボランティア表彰に推薦し受賞して頂くことができました。加藤様に代表して表彰式に出席していただきましたが、会長としてもとても嬉しいことでした。ICT 海外ボランティア会の催しなどを引き続き日比谷同友会会員に随時周知するとともに、日比谷同友会には海外経験豊かな人が沢山メンバーとなっており、その活動に参加してもらいたいと思い会報やHP などを通じ募集も始めたところです。

今年5月に、NTT が発表した新しい中期経営計画「新たなステージをめざして 2.0」はグローバルビジネスの拡大もその柱に挙げています。皆様の活動はその戦略をサポートする事にもなるかと思えます。

このようにICT 海外ボランティア会は、日比谷同友会にとって関連が深く、その活動に大きく期待

しており、今後とも継続した連携と協力を宜しくお願いしたいと思います。

最後に、ICT 海外ボランティア会の今後益々のご発展をご祈念するとともに、会員の皆様のご健勝とご活躍を心より願いご挨拶とさせていただきます。

(平成27年6月18日記)

## 特別寄稿

### 本気かどうかの評価のキメ手、数字で評価などしない

ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝

#### 【真藤 恒氏語録】

人間の評価ということについて、評価というのは本気でやっているか、本気で取り組んでいないか、そこが第一義的な責任論だから、基準はそれだけである。仕事に熱意を持って本気になって取り組んでいる人が、一番尊いと思う。

業績評価でたとえば、事業部別に業績評価していても、それで事業部長の能力を判定するとか、そういうことは全然別の話である。

肝心なことは、マネージメントのカジのとり方の判定であって、苦しいバウンダリーなら、誰がやっても数字は悪くなるし、いいバウンダリーなら、誰がやったって数字が良くなる。数字が良くなったから、責任者個人の業績がいい点数をつけられる。そんなものではない。

分権化のきびしさとはいいながら、そういう機械的な判断では話にならない。分権に絶え得るだけの努力をしているか、絶え得るだけの能力ありや否やということで、数字の上でどうだこうだと、そんな機械的なものではない。

月次決算で出てくる数字が、その部門なり工場の責任者の能力と、イコールというケースはあるけれども。

#### 【石井 孝氏のひと言】

ソフト開発を始めてから、設計、コーディング、テストなどの細かい工程毎に、社員個人毎に、稼働工数や、バグの発生状況などを、作業日報という形で記録に残し、自動集計・分析するよう努力してきた。

これは、ソフトという眼に見えないアウトプットの生成過程を、今流に言えば「見える化」し、コスト、品質、進捗などの状況を的確に把握ができるようにするための試みである。

また、もう一つの狙いは、組織防衛の意味もあった。「彼等は、社長がバックにいることをいいことにして、好き勝手にやっている」のではないかと、という陰口もあったからである。

このソフトウェアに関する生産管理の試みは、総務経理部長に非常に熱心な人を得、各プロジェクトのコストを含めた進捗が日次で分るようになり、ソフトウェアの原価管理を研究する大学の先生が調査にこられるところにまで到達できた。

このような次第で、総裁着任早々から、電電事業に月次決算を導入した真藤さんに、誉めてもらえるのではないかと、社長講話の際、担当者が報告したところ、まことにそっけないあしらいであった。

目の付け所が、根っから違っていたのである。たとえ、それが事実であっても、点数稼ぎとみられ

るような言動にたいしては、嫌悪感を覚えるようであった。

## 特別寄稿

### 私の国際経験

元通研基礎研究室長 梶原 正幸

#### 1. はじめに

ICT 海外ボランティア会から内容自由、分量 2,000 乃至 3,000 字の同会会誌への投稿依頼を受け、何を書けば良いか悩んだ。NTT 電気通信研究所での研究活動について書くことも考えたが、ICT 海外ボランティア会からの依頼なので国際経験を書くことにした。

#### 2. 初めて海外へ

##### - ミュンヘン工科大学(Technische Universitaet Muenchen, TUM) 客員研究員

私が初めて海外に出たのは DAAD (Deutscher Akademischer Austausch Dienst、ドイツ学術交流会) の支援及び当時の文部省の推薦により 1969 年に TUM 客員研究員としてミュンヘンに向いた時であった。TUM では共同利用大型コンピュータを使用し言語データ処理方式の研究に従事した。

ミュンヘンでは文化、日常生活、物事の考え方などあらゆる面で日本との違いを感じ、その後の生活に大きな影響を受けた。特に、ミュンヘンに行く前に私が出した手紙などが教授室の戸棚に整理され、保管されているのには驚いた。ドイツは整理、整頓の国である。

また、TUM の会議室にはオームの法則で有名な G.S. オーム教授の写真が掲げてあった。最近と同教授の銅像を一般市民も大学建物前で見る事が出来る。

##### - TUM とのその後の関わり

###### — TUM 再訪

1970 年に帰国後も TUM とは連絡はとっていた。例えばその後ミュンヘン再訪の機会に、旧研究室訪問の可否を伺ったところ、後任の教授が曾ての私の担当教授は退任したが、私のことは先任教授から聞いているとのことだった。これも上記のごとく書類の整理、整頓、生じた用件継承の徹底ぶりを示す好例である。訪問は歓迎された。

###### - TUM からの依頼 1 : 学生の手配

TUM の別の教授から日本で音声処理の研究で博士号を取りたい学生がいるので適する大学を紹介して欲しいとの連絡があり、名古屋大学を紹介した。学生はその後博士号を取得し、日本で働いているとのことである。

###### — TUM からの依頼 2 : Ansprechpartner (相談役)

2008 年に TUM から連絡があり、TUM 相談役になることを要請され、現在迄その任に当たっている。相談役として 2 年に一度程度ミュンヘンを訪れ、TUM Excellent 化の方法論や留学生増加対策の議論を行っている。TUM 日本同窓生の状況については、ドイツ・バイエルン州東京事務所のご好意により同所事務所を借りて 1 年に 1 度同窓会を開き、その様子を TUM に報告している。



### 3. 国際会議活動

#### - 論文投稿

NTT では在職期間前半は交換システムの実用化研究に、後半は通信ネットワークに関する基礎研究に従事した。特に基礎研究の成果として以下の論文が IEEE 通信部門 (Communications Society, Comsoc) 論文誌に掲載された。

- Consideration on Call Processing Function Distribution to Subscriber Terminal, 1979
- Future Local Telephone Network Configurations, 1980
- Specification and Verification of Switching Software, 1985

#### - 国際会議での論文発表

論文誌への投稿の他、Comsoc が主催する通信に関する国際会議 (International Conference on Communications, ICC や Global Telecommunications Conference, Globecom) で論文発表も行った。

#### - Session Chair の経験

IOC や Globecom での論文発表の傍ら、論文発表セッションの合間を縫って開かれる各種技術委員会、特に専門分野である通信ソフトウェア技術委員会 (Communications Software Technical Committee) には国際会議に参加する度に毎回出席した。委員会では将来の会議開催要項について意見を述べ、提案したセッションが採択され、Session Chair を幾度か勤めた。

#### - Communications Software Technical Committee Chair に就任 :

通信ソフトウェア技術委員会に出席し、重要と思われるセッションテーマの提案やセッション構成案を提案するうち、通信ソフトウェア技術委員委員長に就任することになった。

技術委員会委員長の役割は将来に向けて技術委員会が取り扱う技術テーマおよびそれに関するセッションの提案である。中でも重要なのは国際会議最終日に開かれる Comsoc 全体会議で、各技術委員会が次回国際会議での主催希望セッションを出来る限り多く獲得することであるが、この獲得競争は熾烈であった。

#### - セッション企画

幾つかのセッション企画に関わったが、特に印象に残っているのはカンヌで開催されたデータ通信国際会議において IFIP 委員のパリ大学バルサイユ校教授と共に技術的に将来重要になると思われた「イ

ンテリジェントネットワーク」に関するセッションを創設したことである。

#### － アジア委員会

従来 IOC や Globecom で日本からの論文が採択され難いとの印象があった。この事態に対処すべくアジア委員会が創設され、日本からの投稿論文を事前査読し、関係技術委員会や Comsoc 全体会議の場で優れた日本の論文の採択を推薦した。

#### 4. 海外技術者との交流

以上で述べた Comsoc 論文誌への論文掲載、国際会議での論文発表を円滑に行うには通信技術動向の把握や海外技術者との交流が重要と考え、以下の大学教授招聘や通信事業会社との交流を行った。

- － コロンビア大学コンピュータ科学専攻 Dr. M. Schwartz 教授 1ヶ月程度滞在
- － モントリオール大学コンピュータ科学専攻 Dr. G. Bockmann 教授 1ヶ月程度滞在
- － ブリティッシュ・テレコム研究所 Dr. L. A. Jackson 研究室長 他数名 短期滞在

また、以上の研究者を我家に招待し、個人的にも親交を深めた。

ニューヨーク出張時には後に Comsoc 会長になった M. Schwartz 教授宅に招待され、G. Bockmann 教授には我家の子供達がモントリオールの教授宅に招待され、子供達はすっかり海外志向になった。



#### 5. 研究者の派遣

海外研究者との交流をさらに深めるため、旧基礎第五研究室の研究者を共同研究のため上記海外研究機関に派遣した。

#### 6. その他の国際活動

以上では主として IEEE に於ける活動について記したが、以下ではそれ以外の活動について記す。

##### － CCITT (現 ITU) —SG11

1974年3月オタワで開催された通信網のデジタル化に伴う No.6 共通線信号方式仕様書編集委員会に出席した。この委員会での課題はヨーロッパ方式と共に日、米方式の併記であった。

##### －AT&T ベル研究所 Murray Hill 訪問

AT&T と NTT との技術交流協定の一環として 1976年9月に当時のベル研究所 Murray Hill を訪問、各種呼処理に必要な交換機プロセッサ処理能力に関して講演した。ベル研からはL部長の出席があり、

好意的意見を頂いた。

#### － 第14回 International Switching Symposium (ISS) 横浜大会

このシンポジウムは通信サービスを提供する世界の主管庁、または事業者が共同開催するものであり、日本では1992年12月に横浜で開催された。このシンポジウムではスペインテレコム技術者と共に通信ソフトウェア関係のセッション司会を担当した。

### 7. 終わりに

IEEE 技術委員会は数年間の活動実績によりその存続が問われる。このため委員会は出席者から多くの有益なアイデアを募り将来の国際会議活動に備える必要がある。日本では「沈黙は金なり」といわれるが、欧米では「沈黙は無」であり、備えないことを意味する。国際会議の場では発展が期待される技術テーマを積極的に提案し、その分野において存在感を示す必要がある。

最後に、上記の経験に関しNTT電気通信研究所およびオムロン株式会社関係者のご支援に感謝致します。

(平成27年6月3日記)

## 技術協力視察回想

### 在アフリカの仲間たち

NTT元取締役人事部長 吉田 實

(本文は「1998 でんでん随筆 (NTT ジャーナル社)」より、著者及び出版元の了解を得て転載いたしました。編集担当)

今年(1987年)の七月八日早朝、私はケニアの首都ナイロビ空港に降りた。聞いていたとおり、赤道直下とはいえ標高千七百米の高地のためヒンヤリとして、夜行便で寝不足の体には、心地よい空気だった。空港には、JICAの専門家としてケニアの郵電公社に勤務している高橋鉄夫さんをはじめ、青年海外協力隊員としてケニアの電気通信事業に従事しているNTT社員の諸君が出迎えに来てくれた。

アフリカ地域には、専門家として六名、青年海外協力隊員としてボランティアで勤務している諸君が三十名と、約四十名近いNTT社員が厳しい環境のもとで、苦勞をしていることは御存知の方が多いと思う。

私の今回の出張は、できるだけ多くのこれらの諸君に会い、その働きぶりをこの目で見、仕事上のあるいは生活上の悩み、問題はないか話を聞き、また、現地の日本大使館やJICAの現地機関によろしく願いしてくるといったことで、合計三泊という短期間の間にできるだけ多くの人々と会うスケジュールを設定した。

一昨年(1986年)の十二月に、マラウイ国の協力隊の諸君が、正規の休暇中のバス旅行の際、交通事故に遭い、六名が死亡するという大惨事に見舞われ、わがNTT社員も二名が重傷を負った事件について御記憶の方も多いと思う。この時、この報告を受けた真藤社長は即座に関東通信病院医師団の現地派遣を指示され、他企業在籍の協力隊員も含めた負傷者の日本への緊急移送と関東通信病院での治療により、負傷者の方々もかなり回復されたが、真藤社長の素早い決断は、社長の日頃強調している生命の尊さ大切さを自ら実践したものであり、余り知られていないが、現地でその当時の状況を聞くにつけ身の引き締まる思

いがした。

そのほか、マラウイで他企業の協力隊員一名が、マラリアで死亡したが、マラリアは最も恐ろしい病気で、予防注射もなく、アフリカ到着一週間前から帰国後一ヵ月以上にわたって、毎日二錠の薬を飲まなくてはならなかった。この薬がまた曲者で、副作用がきつくと、胃の調子が悪くなり、食欲も全くなくなり、飲んでいて間中苦しめられた。

そのほか、黄熱病、肝炎、コレラの予防注射を受けたが、エイズ以外にも、予防法・治療法のない未知の熱病がいくつかあり、人と野生動物から感染するので注意するようという指示を受けた。

このように厳しい環境の中で頑張っている NTT の仲間がいるということを読者諸兄にも是非知って頂きたいと思う。

設備の非常に整ったホテルで一休みした後、ケニア郵電公社電気通信総局のナンバー 2、アリウさんを表敬訪問した。ケニアの電気通信はまだまだ発展途上にあり、コーヒーをはじめとする農作物の輸出の不振と石油輸入価格の高騰のため国の経済が非常に苦しく、日本からの無償援助を期待しているというお話を伺った。

この他、専門家や協力隊員がお世話になっている JICA の事務所、NTT 社員の柳沢君がトレニーとしてお世話になっている伊藤忠商事を訪問し、平素の御礼を申し上げた後、日本大使館では千石大使にもお目にかかった。これらの方々からも、実質的な失業率は 50% を超えており、ケニアの経済は非常に苦しいのは事実だが、日本として輸入する品物がないのでどうしようもなく、仮に無償援助の話が成立したとしても、日本の輸出超過を益々強める結果になってしまうというお話を伺い、発展途上国との関係の難しさをヒシヒシと感じた。

ナイロビは人口約百万、そのうち日本人は約八百人とかなり多く、主要商社をはじめ、多くの企業が事務所を置いており、アフリカの重要拠点としてのケニアの位置づけが、よく認識できた。専門家の高橋さんは、日本人会の役員をしており、奥様も婦人部長ということで、日本人の間でも非常に顔が広く、NTT 社員として、ケニアの地域社会にもしっかり根付いた活動をされており、頭の下がる思いであった。

専門家のうち、エジプト在住の浜野高義君、ガーナの田上智君もはるばる駆けつけてくれ元気な顔を見せてくれた。特にガーナの田上智君はガーナ郵電公社の労働局長兼経理局長といった役割を担っており、出発直前までゼネスト突入かという事態で、連絡もつけられず、無駄足覚悟でナイロビ空港に出迎えに行った位で、無事着いたと聞いた時にはホッとした。彼の言によると、ガーナと比べると涼しい気候と都市としてのナイロビの立派さを見て「ここはアフリカとは到底思えない」ともらしていたのが印象的であった。

夜は、高橋さんのお宅に招待され、奥さんの心尽くしの久しぶりの日本食に舌鼓をうった。この席にケニア農業大学の教授をしておられる新井さんも駆けつけていただき、先生手づくりの寿司もご馳走になった。アメリカの大学からケニアの大学に移られた由で、ここにも日本人の国際的な活躍の拡がりを感じさせられた。

高橋家の貴重な日本食のストックを我々が奪ってしまって、今となっては反省しきりだが、インド洋のマグロやタコを握っていただいた新井先生にも、紙上を借りて厚く御礼申し上げたい。

ケニアには、協力隊の諸君は六人おり、約五百キロ離れた海岸のモンパサにいる山岡君（東京中野局）、原田君（東村山局）も夜行列車で駆けつけてくれたが、限られた時間の中では充分話も聞けず申し訳ないことをした。

ナイロビ在住の佐々木君（春日井局）、八月に入って元気に帰国した長里君（九州総支社）、宮田君（津島局）には、ナイロビ市内を案内してもらった。

とくに私が希望して中野君（九州 NW 支店）が働いている工事事務所を訪問し、所長さんにも会い、



同僚にも会って、彼が皆から信頼されていることがよく分かった。

NTTの諸君は、日本の電話局でいえば、工事係長にあたる仕事をしているが、現地人の同僚は四十歳前後で、給与は月額三万五千円位で、ケニアではマズマズの生活をしている由だが、隊員諸君は、月給五万円とバイクが貸与されており、生活に困ることはないとのことで安心をした。

二泊したケニアに別れを告げ、アフリカの最高峰標高五千九百米のキリマンジャロの噴火口と万年雪を下に見て、約二時間の飛行でケニアの南隣りの国タンザニアの首都ダルエスサラーム降り立った。

ダルエスサラームは、インド洋に面した南緯八度の位置にあり、丁度冬の時期にあたり、一年中で最も過ごしやすい時期とのことであったが、そこは南国、気温二七～八度で、日本の真夏と変らなかった。

入国審査が厳重で、有り金の全部数えさせられ、荷物もすみずみまでチェックされ、一時間以上もたつて外に出ると、協力隊七名の諸君が全員迎えてくれていた。

ダルエスサラーム在住の日本人は全部で二十名で、そのうちNTT社員が七名ということで全日本人の三分の一が出迎えてくれたことになる。商社も駐在員一名のみということで、ナイロビとは全く違う世界であった。

ナイロビに比べると設備も劣悪なホテルで一休みすると、隊員の一人高倉君（飯塚局）に、魚市場に行ってみませんかと誘われ、散歩に出た。夕暮れの砂浜には小さな漁船が着いており、板切れの上に魚が並べられていた。「タカクラ」とあちこちから声をかけられ、彼はスワヒリ語でなにやら話しているが、当方には全く分からない。アジに似た魚や、カワハギなどにまじって見たこともない魚が並べられていた。協力隊の諸君もここでしばしば魚を仕入れている由で、相当な顔の売れ方で、彼等の現地への溶け込み方が誠に嬉しかった。

夜は、ホテルで、同行の戸崎雄一ロンドン所長、ケニアから同行してくれた高橋さんと共に、七人の諸君とささやかな宴をはり、楽しい一刻を過ごした。

岩崎君（名古屋NWC）、渡嘉敷君（那覇NWC）、鈴木君（幕張局）、市川君（同左）、上西君（山科局）、原君（堺局）に高倉君で、大変苦労しながらも楽しく過ごしている様子を聞かせてもらった。

レクリエーションも釣りと海水浴だけで、その他には八カ国が国別にチームを結成し、ソフトボールのリーグ戦をやっており、NTT社員が中心の日本チームは二位とのことで、こんなところにも諸外国の人々との健全な交流がうかがえ心強く思った。

高倉君と渡嘉敷君は、ボランティアとはいえ、奥さんや子供さんを日本に残しての単身赴任で、本人はもとより家族の御苦労、御心配も大きいのではと思われた。しかし、皆、英語は殆ど忘れたといいながらスワヒリ語で日常の仕事や生活をこなしているのを見るにつけ、若さと逞しさを強く感じた。

二日目は土曜日のため、郵電公社・JICAのアポイントがとれず、日本大使館に表敬にうかがったが、大使は出張中で参事官にご挨拶をした。協力隊員が日頃お世話になっていることについて御礼を申し上げると、「とんでもない、我々の方がNTTの皆さんにお世話になっているので、御礼を申し上げるのはこちらの方です」といわれ面喰ったが、電気通信サービスの極めて悪い当地では、我々の仲間が重要回線のメンテナンスを時に応じて担当し、通信を確保していると聞き、三十歳前後の若いNTT社員が、日本大使館や外国の大使館の方々まで信頼されている様子がアリアリとうかがえ、これほど嬉しいことはなかった。

ダルエスサラームでは、わが仲間が勤務している電話局の機械室・試験台を訪問し、線路工事の現場も見せてもらったが、現地の方々にも人なつこい挨拶をされ、皆で記念写真もとってきた。中にはNTTの中央学園で研修を受けたという人も二人おり、日本に対して非常な親近感を持っていたが、地味ではあってもこうした国際協力の大切さを痛感させられた。

市内の道案内には、貸与されたバイクに乗った高橋君が先導してくれたが、何分にも大きくエグれた泥道が多く、他車の乱暴な運転と相まって、後で見ていると交通事故が心配で仕方がなかった。

正味二十五～六時間のタンザニア滞在ではあったが、協力隊の諸君と会い話ができ本当によかったと思う。

土曜日の夕刻、出国の際再び徹底的な荷物のチェックを受け、カメラのレンズまで開けさせられ、いい加減うんざりしながらタンザニアをあとにした。

帰国後、マラウイの協力隊の任期を終えて帰国した横山君（横浜NWC）に会ったが、マラウイには日本大使館もなく（駐ケニア大使の兼任）、日本人は協力隊員のみという話をきき、厳しい環境の中で、アフリカ諸国の電気通信のために活躍しているNTT社員に想いをはせた。

しばらくしてタンザニアの諸君から手紙が届いたが、「入出国の際いやな思いをしたと思うが、タンザニアの人々は純朴でよい人ばかりです。決してタンザニアに悪い印象を残さないで下さい」と書いてあった。この気持ちこそ国際友好の基本ではないかと思い、私自身大いに反省させられた。

心やさしい在アフリカの専門家・協力隊の諸君。くれぐれも病気と交通事故には気を付けて下さい。そして大役を果たし無事に帰国する日を心待ちにして待っています。

## 海外技術協力の思い出

### アジア太平洋電気通信共同体（APT）

NTT コムウェア元監査役 紅林 芳夫

APT (Asia Pacific Telecommunity) は、1979年5月に ESCAP と ITU のジョイント・イニシアティブにより設立された地域国際機関です。アジア・太平洋地域の電気通信基盤及びサービスの構築と発展を目的としています。私はAPT への2代目 JICA 専門家（技術コンサルタント）として、1982年10月から1984年の12月までバンコクに派遣されました。

他の JICA 専門家のように業務エリアが決まっている訳ではなく、何をやるかは自分で決めなければなりません。極端に言えば、年間行事として行われる総会やセミナー及び展示会のお手伝いをしていれば、それはそれで済んでしまいそうな状況でした。の海外勤務の2年間で、イベントの手伝いで終わりたいは無かったので、自分なりに何をするかを定めることにしました。まず、メンバー国の現状を知らないといけないので、現地調査をすること



にしました。それも出来るだけ APT の事務局員が今まで訪問したことがない国を中心として訪問先を決めて行きました。手始めに、イラン・イラク戦争中のイランに訪問の依頼文書を出したところ、案の状、断られてしまいました。鎖国中のビルマ（ミャンマー）にも手紙をだしたのですが、こちらは無しの礫です。

やむを得ず、手近なマレーシアに訪問依頼を出したところ、OK の返事が来たので早速出かけました。そこで提起されたのは、長年搬送機器の雑音混入に悩まされており、ITU の専門家が調査しているのだが、全く解決の糸口が見つからない、何とかならないかというものでした。

APT では JICA の特別ファンドで短期専門家（3 ヶ月程度）派遣の予算がありましたので、NTT から 3 名の伝送専門家を保守プロジェクトとして派遣することになりました。3 人とも海外派遣は初めての経験で、しかも 3 ヶ月という短い期間でしたから初めは悪戦苦闘していました。派遣期間の終了間際になってついに原因を突き止め、日本からシールドケーブルを取り寄せて張替えを行い、見事問題解決に成功しました。日本人専門家は、言語能力やプレゼン能力の問題で欧米の専門家と比較して一般的に評価が低いのですが、保守プロジェクトのような地道で実務的な問題には、大きな能力を持っていることを認識しました。これ以降、保守プロジェクトの開発に力を入れていくことにしました。

そうこうするうちにイラン・イラク戦争も小康状態になり、イランから訪問受諾の手紙が来ました。この時期のイランは、ホメイニ革命、イラン・イラク戦争と激動の時代にあり、10 日間ほどの出張でしたが語りつくせないほどの経験をしました。そのエピソードを二つだけご紹介します。

最初の日、電気通信省のオフィスで訪問趣旨を説明するため 20 人程の会議を開いたときのことで、会議の冒頭で皆が一斉にペルシャ語で何やら大声で唱え始めました。長さは 1 分ほどで内容はちんぷんかんぷんでしたが、最後の「インシャラー」だけは聞き取れました。おおよその事情は呑み込みましたが、これが先制パンチでした。もう一つは会議で出てきた APT への要請が、「革命前に米国の援助で設置した No.1ESS の部品が無くて困っている。何とかならないか」というものでした。こんな要請が出てくるとは想定外で「難しいと思うが検討して見ます」という答えで誤魔化しました。



テヘランでの金曜集団礼拝後の人



集団礼拝後は家族揃ってピクニック気分でモス

ビルマからは、レター発出の約 1 年後に訪問受諾の連絡が来ました。早速、1 週間ほどの出張に出かけましたが、イラン訪問の上を行く想定外の連続でした。先進国は旅行雑誌やその他の情報により、訪

問しなくてもほぼ見当がつくのですが、開発途上国となると想定外どころか全くの想像不能の事態が起こります。私はものぐさで、あまり現場主義では無いのですが、開発途上国だけは実際に現地調査をしないことには、判断を誤ることを実感しました。

ビルマでのエピソードも二つだけ紹介します。大体、出張するときは、日本人であることがバレないように、長髪にしてできるだけ着古した服を着て、スニーカーで出かけていました。しかし、ラングーンの空港に着いたとたんに、「こりゃダメだ」思いました。男性はだれもズボンをはいておらず、履物と見れば誰も靴を履いていないのです。私を空港まで出迎えにきた郵政省の職員も開襟シャツにロンジン（腰巻のようなもの）とビーチサンダルでした。その後、郵政省のオフィスで局長に、この時は背広・ネクタイで、挨拶をしました。局長はさすがに冷房の効いた部屋で背広とネクタイをしておりました。しかし、私が机に近づくと握手をするために立ち上がったのですが、下はロンジンでした。

ビルマは当時鎖国中でしたが、日本の通信機器メーカーで長期滞在している人がいたので、ある晩に夕食を一緒にしました。そこで、「ビルマ訪問の依頼に、何故一年もかかるのですか」と聞いたところ、「外国人の訪問許諾は、閣議決定事項です」というのが答えでした。ここでも途上国音痴を再確認した



TUN

### ビルマの伝統的舞踏

(実に綺麗ですが、この観光的写真に誤魔化されてはいけません。)

次第です。それでも、その後 APT を経由した保守プロジェクトとして、JICA 短期専門家がビルマに派遣されましたので、私の音痴出張も多少は役に立ったのだと思います。

この他にも、モルジブに無線専門家を短期派遣して、その後島嶼間通信の JICA 無償援助に繋がった

プロジェクトもありました。APTの短期専門家派遣は、バイラテラルで行うのは困難な国に対して、マルチラテラルというヴェールを被ってスピアヘッドの役割を果たすことが出来るのではないかと思うようになりました。

上記の他に2年間で訪問した国は、インド、中国、インドネシア、シンガポール、韓国、ブルネイ、オーストラリアです。出張の準備と帰国後の報告書の作成に大半の時間を費やしてしまった感じです。APTにおける私の貢献はわずかなものでしたが、この間に私が受けた経験は、その後の人生に大きな影響を与えるものとなりました。

今でも、開発途上国だけは訪問して見ないと解らないと胆に銘じています。

## 海外情報談話会開催模様

### 事務局

標記談話会は去る6月12日（金）、JTEC会議室において開催されました。講師はナチュラル研究所所長 石川 宏氏で、話題は「福島第一原子力発電所事故における放射線量の計測と分析」でした。石川様の博学はもとより、信念、行動力に基づく貴重な体験を伺い極めて好評で、講演後の意見交換の盛んでした。25名の参加でした。講演概要は次のようです。



東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故から4年経過しましたが、記憶は薄れることはなく、廃炉までまだ大きな努力を必要としています。これほどの社会を揺るがす事故は経験が無く、技術者として大いに考えさせられました。

講演者は東京都日野市において、デジタル気象台を開設し、その一環として、ガイガーカウンタを設置し放射線量を計測し、ホームページに公開していました。事故直後に、日野市にも放射性物質が飛来し、異常データをキャッチしました。CNNをはじめ、海外を含む多くのかたがこのホームページをご覧になり、思わぬ反響がありました。閲覧者は一日で1万を超え、CNNを始め内外のメディアからの取材もありました。

この瞬間をリアルタイムに、インターネットで見ることができたサイトは、ほとんどなかったようで、見えない放射能の恐ろしさに対し、ほかに適切な情報がなかったために、石川氏のサイトに頼ったのではないかと思います。福島原発事故独立検証委員会(いわゆる民間事故調)の最終報告書に、当研究所の情報公開活動が紹介され、

「政府あるいは東京電力は人々がもとめる情報発信をしてこなかった。そのなかで都内への放射性物質飛来を観測していたナチュラル研究所のサイトには多数のアク



セスがあり有用であった」と紹介されました。

この談話会に参加されました石井 孝氏は、Facebook で「極めてユニークで、且つ貴重な示唆に富むお話で、感心した。その後の討議で、さらに興味深い問題が出された。それは、全国に限らず存在する電話局の地電位を連続的に観測することによって、地震予知が出来るのではないか、と云う話である。これは、今流に言えば、IOT ネットを活用したビックデータ処理で、必ずや面白い結果が出るものと期待される。NTT も、是非、積極的な協力をお願いしたい。」と述べております。

## ◆ 第 17 回海外情報懇談会開催のお知らせ

主催 ICT 海外ボランティア会  
協賛 情報通信国際交流会

第 17 回海外情報懇談会を以下により開催いたします。

参加をお待ちいたしております。

日 時：平成 27 年 7 月 31 日 (金) 午後 3 時～5 時

場 所：**JTEC** (海外通信・放送コンサルティング協力)  
(五反田駅下車徒歩 5 分、道順は JTEC のホームページをご覧ください)

話 題：「囲碁の効用と日本棋院の取り組み」

講 師： 日本棋院常務 **真崎 秀介氏**

講演概要： 認知症が世界で急増の見通しというニュースが流れています。各国で高齢化が進んでいることが原因とのこと。

人間の脳は、左脳で計算や暗記、右脳で空間認識を行っていると言われていています。左脳右脳をバランスよく使うことが大切なのですが、左脳に偏っている人が多いそうです。このバランスが崩れていることがボケの原因の一つと言われていています。

囲碁は右脳を使うゲームです。特に序盤から中盤は、計算能力よりも空間認識能力を使う必要があります。また、囲碁は日本の伝統文化への理解、礼儀作法の修得、集中力が身につくなど子供の学業成績とも相関関係があると言われていています。このような囲碁の効用と日本棋院の囲碁普及の現状を紹介いたします。日本棋院は昨年、創立 90 周年を迎えましたが、100 周年を目指した「ビジョン」を策定しました。将来の取り組みについてもお話したいと思います。

参 加：入場無料 お気軽にどうぞ！(会員制ではありません)参加ご希望の方は、事務局 加藤隆 [info@ictov.jp](mailto:info@ictov.jp) までご一報下さい。

## 会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申し上げます。

送付先は、編集担当 加藤 隆([kato2415@jasmine.ocn.ne.jp](mailto:kato2415@jasmine.ocn.ne.jp)) , または

村上勝臣([katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp](mailto:katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp))までお寄せ下さい。

## 編集後記

・ 日比谷同友会会長宇治さんから巻頭言として、当会への励ましのお言葉をいただきました。当会の運営に関し、並々ならぬご支援をいただいております、この場を借りて御礼申し上げます。今後とも NTTOB を中心とした数少ない海外関係の集まりとして、自覚をもって進めたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

・ 元通研基礎研究室長の梶原さんから、日頃なかなか知り得ない研究者としての大変興味深い国際活動を紹介いただきました。また紅林さんから専門家として APT での活躍の一端を紹介いただきました。かつて NTT も支援して発展した APT の礎を築かれました。丁度その時期に私も NTT バンコック事務所に勤務しており、大変お世話になったことを思い起しております。吉田さんからいただきましたアフリカでの NTT 社員の青年海外協力隊の皆さんの活躍振りのご寄稿と同様に貴重な記録かと思えます。 (以上 加藤)

・ 石井さんの「真藤語録」は分社化を例にし、今回は難しい人事評価に関する話題でした。石井さんの試みた見えないソフトの生成作業工程を「見える化」した工夫は画期的なものと思えました。真藤さんもそれは評価していたものと感じました。

・ 吉田さんの「在アフリカの仲間」は、海外で活躍する青年海外協力隊員 (JOCV) や専門家達の、現地の人達の目線で対応する生々しい皆さんの姿が伝わってきます。SV の経験ある私は、カンボジア、トンガで親しく生活を共にした専門家、JOCV の皆さんの活躍ぶりを彷彿とさせるものでした。 (以上 村上)

総編集長：ICT 海外ボランティア会 事務局長 加藤 隆

編集長：ICT 海外ボランティア会 広報部長 村上勝臣

報道部長：ICT 海外ボランティア会 報道部長 山崎義行

発行：ICT 海外ボランティア会 (メール：[info@ictov.jp](mailto:info@ictov.jp))